

オランダ語新正書法

報告

甲斐崎 由典

早稲田言語研究会（編）

『Travaux du Cercle linguistique de Waseda』 第2号

75～83頁

1997年12月31日発行

報告

オランダ語新正書法

甲斐崎 由典

1. はじめに

このほどドイツ語圏で断行された正書法改革は、かなり大幅な綴りの変更を伴うものであり、賛否両論渦巻く一方、辞書・教科書の類は競って新正書法に全面的に準拠した改訂を行っている。このドイツ語新正書法は、接続詞 *daß* や話法の助動詞の変化形 *muß* などのごく基礎的な語彙の綴り方にまで影響を及ぼすもので、まさに抜本的な改革と行うことができよう。

ところで、ドイツ語新正書法とほぼ時を同じくして、お隣のオランダ語圏（オランダとベルギーのフランドル地域¹）でも正書法の改革が行われたことはあまり知られていないようである。このオランダ語新正書法の変更点は、関係するのは主に複合語や外来語だけであり、ドイツ語新正書法に比べると質・量共に小規模なものと言えるが、長らく正書法改革が叫ばれていた事情などを考えると、やはりオランダ語の歴史におけるひとつの重要な事件であることに変わりはないと思う。

そこで本報告では、このオランダ語新正書法の要点と、また正書法の改革に付き物の問題点もいくつか併せてまとめてみた。なお、最新情報の必要性から、変更随時の資料であるホームページをかなり参考にしたことをお断りしておく。

1 正確にはブラバント州北側のオランダ語行政区域、西フランドル州、東フランドル州、アントベルプ州、リンビュルフ州を指す。

2. 新正書法成立まで²

オランダ語で前回正書法改革が行われたのは戦後すぐの 1946 年で、その時の新しい正書法に基づいて編纂された『オランダ語語彙便覧(De Woordenlijst Nederlandse taal)』、通称『緑書(Het Groene Boekje)』はかなり遅れて 1954 年に発行された。しかしこの旧正書法は導入当初から相当な非難を浴び、その最大の理由としては、正書法と言いながら綴りの揺れを公然と認めてしまったことが挙げられる。すなわち、主に外来語の綴り方として推奨綴り(voorkeurspelling)と許容綴り(toegelatenspelling/nakeurspelling)のふたつが定められ、実用上はどちらを用いても間違いではないとされたのである。もちろん、公文書や教育の場では推奨綴りの方が用いられてきたが、この旧正書法の曖昧さは長らく問題にされ続け、結局今度の正書法改革も、本格的な高度情報化を見据えて、その際妨げとなるオランダ語の綴りの不安定さをいい加減に解消しようという認識から実行されることになったようである。

実際、今度の正書法改革の流れは、1994 年 1 月 19 日にオランダとフランドルの文部大臣が、今後は基本的に推奨綴りのみを認めることを申し合わせたことから始まり、その後他の諸規則が整備された後 1995 年 11 月終わりに新緑書が発行された。また新正書法の導入開始は 1996 年 3 月 1 日から、新正書法への完全移行は 1997 年 9 月までに終えるものと決められた。

3. 新正書法の要点

ここでは旧正書法から大きく変わった点についてのみ述べる。

2 近代・現代オランダ語の正書法(改革)の歴史や流れについては、例えば Wal (1994)の第 11 章が詳しい。各時代それぞれの正書法でどのような点が特に問題となったかについても具体的に述べてある。

3.1. 許容綴りの廃止

これについてはすでに触れた。旧正書法で推奨綴りとされていたものを今後は唯一の正しい綴りとするわけである。今回は旧正書法でどのような語に推奨綴りと許容綴りの両方があったかとか、その内の一方を推奨綴りとする根拠は何であるかなどについては調べる余裕はなかったが、旧正書法の推奨綴りというのは、要するに旧正書法時代に辞書の見出し語になっている綴りであり、あるいは公文書や教科書などで使われていた綴りのことであり、オランダ語を外国語として学ぶ者もそうだが、あえて変わった綴り方を覚えてさえいなければ母語話者にとっても、この許容綴りの廃止に関しては特に注意を払う必要はなく、今までと同じと考えて差し支えないようである。

ただし、旧緑書で推奨綴りとされていたもの全てが今度採用されたわけではなく、単独の時と複合語の時が違う綴りになっていたものや、同系の語群の中で統一を乱していたものや、誰もが推奨綴りではなく許容綴りの方を使っていたものの³⁹ 語³については、新緑書では旧正書法で許容綴りとされていた方が正しいものとして採用されている。

3.2. 複合語の-en/-e-

これも今回の正書法改革の目玉のひとつと言えよう。

旧正書法では、単独では語尾に-en を付けて複数形にする名詞に何か他のものを繋げて複合語を作る場合、できあがった複合語が指す物を思い浮かべながら、その名詞に-en-を付け複数形にしてから繋げるべきか、複数形ではない接続語尾の-e-を付けて繋げるべきかを考えなくてはならず⁴、また考えたところで決めかねる場合もあって混乱の素と

3 antichrist, complot, complotteren, corpus, dioxide, elektrocuteren, elektrocutie, emfase, fotokopie, fotokopiëren, harmonica, insect, katheter, kroket, kwantum, lambriseren, lambrisering, makrokosmos, mediëvist, mikrokosmos, oxidatie, oxide, oxideren, pre, preses, prakkiseren, praktiseren, predicatief, product, productie, productief, productiviteit, propedeuse, propedeutisch, publicatie, quaker, vredestraktaat, vulkanisatie, vulkaniseren.

4 これは結局、現代オランダ語の発音では、力点のない en の綴りは n を落とすことで発音するため、力点のない e と en は同じ曖昧母音の発音になってしまうことが

なっていた。具体的に示そう。例えば犬小屋と鶏小屋を考えた場合、犬小屋は普通は犬1匹を住ませるところなので犬(hond)の複数形はhondenであるが hondehok とし、鶏小屋には普通は鶏が2羽以上いるものなので鶏(kip)を複数形にして kippenhok という複合語にすることになっていた。しかし、馬小屋の場合はどうであろうか、単数にするべきか複数にするか迷うところである(旧正書法では paardestal)。また、実際にはかなり混乱が見られ、例えば星(ster)を用いた複合語でも sterrekijker(天体望遠鏡)や sterrenloop(星の軌道)のような上の理屈とは逆と思えるような例も少なくない。

今回の正書法改革では、この一見論理的ながら実用的ではない、意味を元にした区別の仕方を改め、構成語の語尾だけから機械的に複合語の綴りが決まるようにした。

具体的には、いつ複合語の間に-en-を書くべきか⁵を定めており、それにはまず前半部が名詞であることが条件で、その上で

- (ア) その名詞には-(e)n で終わる複数形だけがある場合か、
例 boerendochter, krantenartikel
- (イ) その名詞が-e で終わる名詞の女性形である場合か、
例 studentenzwangerschap, agentenuniformrokje
- (ウ) その名詞の語尾が無音の-e ではなく、-en か-s で終わる複数形がある場合
例 lerarenoverleg, artikelenbundel

にのみ複合語を-en-で結ぶことが決められ、これ以外の場合は-e-を書くことになった。

この規則の導入により、相当数の複合語が今までと違った綴りになるわけであるが、この規則の機械的な適用の前に、再び例外事項も定

大本の原因である。

5 以下の規則で取り決められているのはあくまで-en-か-e-か迷う場合の話だけである。もちろんオランダ語で複合語を作るときに、その間には-en-か-e-しかあり得ないわけではなく、本報告では割愛したが、新正書法でも同じく複合語を作るときに間に入る-s-についても述べている。

められていることに注意しなければならない。すなわち、規則に従えば間に -en- を書きそうな複合語でも、固有の人や物を指す場合 (Koninginnedag, zonneshijn⁶) や、前半の名詞が後半部の形容詞の強めに使われている場合 (boordevol, beresterk) や、前半に動物名を含む植物名 (paardebloem, kattekruid) の場合や、体の部分を表す名詞の内もう充分固定化したと言える複合語の場合 (kakebeen, kinnebak) や、構成語それぞれの意味はもう独立して意識されていない場合 (schattebout, klerelijer) は間には -e- を書かなくてはならない。

3.3. 連語符と分音符の使い分け

連語符と分音符は、母音字が連続した場合に正しい発音を示すために使うもので、今までは多くの場合混用されていたが、今度の改革で両者ははっきりと使い分けられることになった。

まず連語符 (streepje, koppelteken) は、それぞれ独立して存在する語が結びつけられたものである複合語にだけ使われ、それに対し分音符 (trema, deeltteken) は、複合語ではなく、単一の語の内部でだけ使われる。ただし数字だけは唯一の例外で、それぞれの構成部分は単独でも存在するが連語符ではなく分音符で区切る。

連語符の例 zo-even, zee-egel

分音符の例 kopieën, reëel, tweeëntwintig, drieëndertig

また、今までは地名そのものとその形容詞形などの間で不統一であった、東西南北などの付いた地名とその派生語は全て連語符で間を区切ることになった。

例 Noord-Holland, Noord-Hollander, Noord-Hollands

6 ここでも例として2語ずつ挙げてあるだけで、例外がここにある語だけなのではない。

3.4. 英語動詞の語尾

英語からそのまま採り入れた動詞の場合、過去形や過去分詞形の語尾をオランダ語式に付けるか英語式に付けるか一定していなかったが、今回の正書法改革ではそのような場合は全てオランダ語の弱動詞として考えて語尾を付けることが決められた。すなわち、不定形あるいは現在形で語幹が無声子音で終わっていれば-t(e)、それ以外の場合は-d(e)を付ける。

例 faxen - faxte - gefaxt, joggen - jogde - gejogd

4. 問題点

人間の言語は話し言葉が基本であり、話し言葉は書くことを前提に組み立てられているわけではないので、そもそも文句ない整合性を持ち、かつ万人が納得する正書法を考え出すことなどは人工言語でもない限り不可能なのかも知れない。そう考えると、今更このオランダ語新正書法の問題点をあげつらうのは無意味なことのようにもあるが、今回のこの報告のためにいろいろと調べていく内に出てきた筆者の考えをここに少し書いておきたい。

規則というものには例外事項が付き物であるから、新正書法の新しい規則にそれぞれ例外規定があることはよしとしておこう。しかし、その例外規定があまりはっきりしない基準で決められていると問題であろう。これは特に許容綴りの廃止や複合語の-en/-e-に主に関係することである。

許容綴りの廃止に関しては、註に挙げた 39 語を見てもわかる通り、外来語は発音よりも原語での綴りを優先して綴るように決めたのかと思うと、そうでもない例がある(fotokopie, kwantum など)。ここで問題となるのは結局カ行音を c で表すか k で表すかということに行き着くのであろうが、わかり易さを優先するのであればフランス語のように基本的に c しか使わないか、北欧語のように k しか使わないかのどちらかに統一した方が良いのではと思える。

複合語の en/e についても、同じくわかり易さという点で問題があると思う。旧正書法よりはかなり明解な規則になったとはいえ、ここでは特に例外事項も多くなっており、筆者はそもそも複数形にいちいち考えを巡らす必要はないのではないかと考える。例えばアイスランド語のように、格や数による語形変化がはっきりしている言語では、複合語を作るときに必然的に格や数を考慮することも有効であるが、オランダ語はもうそのような言語ではない⁷。従ってここでもわかり易さをさらに徹底させて、複合語の間に入る文字としては、もう読まれることのほとんどない-en-の n は廃止してしまって、いつでも-e-だけにしまえばどうかと考える。

また複合語の-en-/-e-に関する例外事項の終わりの方で、もう充分固定化した複合語(versteend samenstelling)という言葉が使われていたが、直訳すると「硬化複合語」というこのような概念も、個人個人の語感に左右される曖昧な基準であるという意味で問題であろう。文部省側でも結局硬化複合語の一覧表を公表し、例外を規則にはよらず直接示すという形で切り抜けようとしている。

このように見てくると、そもそも正書法を整備するときには、発音を重視するか語源を重視するかというふたつの方向性があることがわかる。そして実際に改革が行われるとなると、新たに定められる規則の多くにはそのどちらかひとつだけが採用されるということは少なく、程度の差こそあれ発音重視と語源重視の考え方が入り交じってしまい、その結果一見すると不規則性ばかりが目立つように感じられてしまうものようである。そしてそれは絶えず変化していく言葉を書き記そうとしたときに、この発音重視と語源重視というのは全く相反する考え方だからである。とすると、結局わかり易い正書法を作り出すためには、例えば筆者が発音重視の立場で意見を述べたように、このふたつの考え方の内もっばらどちらかひとつだけを選ばざるを得ないということになる。

しかしながら、長らく行われてきた綴り方とその字面の雰囲気といったものをぱっさり切り捨ててまで抜本的に改革を行うというのは、実

7 Geerts(1984)の 101 頁 ~ 105 頁を参照。

際問題として相当困難な国家事業であり、全てを言語学的に取り決めるのではなく、ある程度現実的な線で現状との妥協をはかることも重要であろう。またその点では母語話者の方が、筆者のような外国語としてその言語に触れる者よりも頑固になるものである。ということで、まだ導入されたばかりの新正書法に早速難癖を付けるよりは、しばらくその落ち着き具合を見てからまた少し手を入れることを考えるのが理性的な態度といったところであろうか。

最後に、今回は立ち入らなかったが、オランダ語圏の大手語学関係書出版社である Van Dale 社と Wolters'社と Prisma 社は、改革の方向性は原則として文部省側と一致しながらも、一貫して別の改革案を提出し続けている⁸ことを付記しておく。

5 . 文献

Geerts, G. e.a. (red.), 1984, *Algemene Nederlandse Spraakkunst*, Groningen en Leuven.

Horst, J.M. van der, 1997, 'Een lastige spellingregel', in: E.H.C. Elffers-van Ketel, e.a. (red.), *Grammaticaal spektakel*, Amsterdam, 115-121.

Houët, Henriëtte, 1996⁶, *Grammatica Nederlands*, Utrecht.

Koenen, M.J. en Drewes, J.B., 1966²⁹, *Wolters' Handwoordenboek Nederlands*, Utrecht en Antwerpen.

Vries, Jan de, 1997⁴, *Nederlands Etymologisch Woordenboek*, Leiden etc.

Wal, Marijke van der, 1994², *Geschiedenis van het Nederlands*, Utrecht.

6 . 電子文献 (ホームページの所在は 1998 年 1 月 7 日現在)

Access, 1996, *De nieuwe spelling*. [http://www.tijd.be/seminar/online/menux.](http://www.tijd.be/seminar/online/menux.htm)

htm 新正書法だけではなく、実務文書作成のために必要な様々な

⁸ 当初は緑書とこれら 3 社発行の辞書では 859 もの語の綴りが異なっていたが、その後の歩み寄りの結果異なる綴りのものは 170 語に減った。この依然として残

知識を例題を通して学べる。

- Detiger, W.L., 1996, *Spellingbrochure*, <http://www.vandale.nl/downloads/spelling.pdf> Van Dale 社が自ら緑書との違いを表を中心にまとめた PDF 形式 (Adobe Systems 社開発) 文書。
- Hoorick, Bart van, 1996, *Spelbreker*, <http://ger-www.uia.ac.be/webger/ger/spelling/intro.html> 新正書法の成立に至るまでの歴史について少し詳しい。
- Meesters, Gert, 1997, *De spelling-1997*, <http://onyx.arts.kuleuven.ac.be/~gert/spel.html> 今回参考にした中で一番新しい情報を含んでおり、特に文部省側と Van Dale 社との相違点について実例を多く挙げている。
- Ministerie van Onderwijs, Cultuur en Wetenschappen, 1997, *Het ABC van de nieuwe spelling*, <http://www.minocw.nl/spelling/index.htm> オランダ文部省の公式の解説が読めるが、内容は少し古いようである。
- De Standaard, 1998, *Reeks: Nieuwe Spelling*, <http://194.7.253.55/dsbttaal.html> 新正書法成立の頃 (1995 年後半) の一連の新聞記事が読める。
- Verbrugge, René, 1996, *Nieuwe Spelling*, <http://home.pi.net/~andante/home.html> 上記のオランダ文部省のホームページからもリンクされている。例題付きで読みやすい解説。

る違いは主に複合語の-en/-e-に関してである。Detiger(1996)を参照。